

第四回日米道教研究會議參加報告

廣瀬直記

二〇一六年三月二十九日、三十日に、ワシントン州タコマ市郊外のパシフィック・ルーセラン大學 (Pacific Lutheran University) で「第四回日米道教研究會議」が開かれた。この會議は第一回が一九九五年に東洋大學、第二回が一九九八年にボウデイン大學、第三回が二〇〇八年に東洋大學で行なわれ、すでに二十年以上の歴史がある。詳しくは、第三回の論文集『道教と共生思想』(大河書房、二〇〇九年)の序言をご覧いただきたい。

今回はテリー・クリーマン氏と森由利亞氏が中心となつて計畫と準備に当たり、事前に「道教における傳授」

という共通テーマが決められた。ただ、各発表テーマを見ればわかるように、必ずしも一つのテーマに限って議論されたのではなく、時代を見ても六朝から現代に至るまで幅広い。もちろん、いずれの発表においても活発な議論が絶え間なく交わされ、中身のある學術交流ができたように思う。

會議では、豫稿集は作られなかったが、発表者は一ヶ月前を目標に、中國語あるいは英語の論文をメールで参加者全員に送り、同時に他の発表者の論文も読んでおく、というやり方が取られた。事前に司會者や對論者が立て

られることもなかったが、進行に滞りが生じることはなく、むしろ和氣藹々とした自由な雰囲気で作られていた。参加者および発表題目は以下の通りである。

三月二十九日

廣瀬直記(早稻田大學)

「上清經典年代補正―基於賀碧來先生的研究」

池平紀子(大阪市立大學)

「關於《太上洞真智慧上品大誡》的『六通智慧』」

森由利亞(早稻田大學)

“Three Daoist Rituals of Ordination for Novices Who Leave Their Family: Preparation for placing Zhou Side and Wang Changyue in history of ordination ritual of Daoism”(道教出家傳戒儀三種―周思得と王常月を道教の傳度儀の歴史に位置づけるために)

田中文雄(眞言宗豊山派總合研究院)

「道教十王儀禮的發展―黃籙齋與十方」

松本浩一(筑波大學)

「金允中《上清靈寶大法》の普度和正薦」

淺野春二(國學院大學)

「過山瑤族招兵儀式中的神和兵―基於湖南省藍山縣

的田野調查分析」

丸山宏(筑波大學)

「瑤族宗教儀式「拋兵」與相關問題初探」

三月三十日

Terry Kleeman テリー・クリーマン

(コロラド大學ホルダー校)

“The Transmission Ritual in Early Celestial Master Daoism”(初期天師道における傳授儀について)

Stephen Bokenkamp スタイファン・ボークケンキャンプ

(アリゾナ州立大學)

“Masters and Trials: Modes of Transmission in Early Medieval Daoism”(師と試―初期中世道教の

傳授作法)

Gil Raz キル・ラーズ (ダートマス大學)

“Transmission Lineages or Communities of Practice: Buddho-Daoist Stelae of the Northern Dynasties and the Lived Religion of Local Communities.” (派か實踐の共同体か—北朝の佛道混清碑と地域共同体の生活中的の宗教)

Michael Cono マイケル・コモ (コロロンビア大學)

“Jade Women and Stowaways in Ancient Japan” (古代日本における玉女と密航者たち)

Liu Xun 劉迅 (ラトガース大學)

“Quanzhen Nanwu Sect in Late Ming and Qing Nanyang” (晩明から清朝期にかけての南陽における全真教南無派について)

Stephen Eskildsen スティーブン・エスキルセン

(テネシー大學チャタヌーガ校)

“Has the Fontanel Opened?: Wu Shouyang Exposes a Charlatan” (ひよめきは開いたのか?—伍守陽が詐欺道人を暴く)

Daniel Burton-Rose ダニエル・バートン・ローズ

(プリンストン大學)

“The Daoist Commitments of the Peng Clan of Suzhou, 1673-1830” (蘇州彭氏による道教への關與 (1673-1830))

一人当たりの時間は、發表三十分、ディスカッション二十分。發表は、森氏と田中氏が英語、エスキルセン氏が日本語を使用した以外、中國語で行なわれた。ディスカッションも八割以上が中國語だった。

十四名の發表者のほかに、七名のオブザーバーが加わった。Erik Hammerstrom エリック・ハーマーstrom (パシフィック・ルーセラシアン大學)。李豊楸 (元國立政治大學)。謝世維 (國立政治大學)。張超然 (輔仁大學)。山田利明 (東洋大學)。丸山蘇素卿。

ハーマーstrom氏は會場を手配してくださった。

李氏は、道教研究の方向性について、山田氏は、日米道教研究會議の歴史について話をしてくださいました。謝氏と張氏は、李氏とともにディスカッションを大いに盛り上

げてくださった。

以下は、各発表内容のごく簡単な紹介である。(會場の報告は發展途上の議論であることが前提なので、今後も改變される可能性がある。また紹介者の誤解や曲解も充分あり得ることを附け加えておく。宋代以降に關する發表については、森田利亞氏によるまとめを採用した。)

廣瀬は、「上清大洞眞經目」に結びつけられる上清經の成立年代について、イザベル・ロビネ氏の研究をもとに再検討した。上清經研究のスタンダードともいえる氏の研究を補充することを通して、上清經研究のよりよい基礎を提供することを目指した。

池平氏は、まず古靈寶經の一つ『太上洞眞智慧上品大戒』の各版本の違いについて検討し、次いでそこに見える「六通智慧」が大宇宙の完全な智慧の働きであり、戒を守って體內の六つの感覺器官に神々を宿すこと(すなわち戒神の働き)によって人にも備わるとされることを明らかにした。

森氏は、六朝末から明代に至る間に登場した『三洞奉

道科戒營始』卷五「度人儀」、賈善翔『太上出家傳度儀』、周思得『上清靈寶濟度大成金書』卷十九「披戴儀」という三種の道教出家傳戒儀を分析し、(1)世俗を辭去する儀禮、(2)易服の儀禮、(3)傳十戒の儀禮という三項が行われる定型が連綿と繼續していることを明らかにした。

田中氏は、道教における十王儀禮の發展過程について考察した。道教の十王儀禮は單に佛教のものを模倣したのではなく、道教の死者救濟儀禮である黃籙齋と一體となつて發展していった點に特徴があり、氏はそのことを十王神と十方天尊との結びつきから明らかにした。

松本氏は、近世黃籙齋に見える、破獄から煉度を経て授戒・傳符に至る一連の死者救濟の儀禮プロセスについて、金允中『上清靈寶大法』を取り上げ、その内容を家の死者を救濟する「正薦」と無数の死者を救濟する「普度」との違いを軸に蔣叔輿『無上黃籙大齋立成儀』と比較分析した。

淺野氏は、湖南省永州市藍山縣ユーミエン系ヤオ族の

儀禮における「招兵」について、主として「五穀兵」と稱される穀物の靈魂を回収する儀禮と、家先壇に蓄積される家先兵を回収する儀禮について考察した。

丸山氏は、湖南省永州市藍山縣ユーミエン系ヤオ族の法師が新弟子のイニシエーションに際して行う「抛兵」儀禮と、藍山ヤオの宗教的世界観における兵と人との關係を、現地の諸文献と、英國オックスフォード大學ボドレアン圖書館藏文献を読み解き、フィールドワークでの觀察と總合しながら分析した。

クリーマン氏は、さまざまな傳授儀禮が初期天師道のメンバーシップを特徴づけていたことを指摘したうえで、主に敦煌文書S二〇三にもとづいて、籙の傳授儀禮について分析し、籙の傳授を通して、道士が新たな位階に上ることや、世界に平和と正義をもたらす責任を負うようになることについて明らかにした。

ポーケンカンプ氏は、『神仙傳』張道陵傳や『抱朴子』、『眞誥』に見える「試」に關する記述を分析し、傳授における「試」がもつ意味について考察した。道教に

おける傳授は、四世紀の天師道南渡以前には師と入門者との間で集團的に行なわれていたが、南渡以後には師と弟子の間で個人的に行なわれる傾向が強くなり、その結果、傳授における「試」が重要になったとする。

ラーズ氏は、北朝造像碑の背後にあったコミュニティの道教實踐について考察した。造像碑に登場する道士の稱號などを詳細に分析してみると、そこに見えてくる道教の實態は、佛教をも含めた非常に折衷的なものである。したがって、彼らの道教實踐は、天師道や靈寶派、樓觀派のような傳統的カテゴリーに結びつけて理解するよりも、むしろさまざまな經典や儀禮や教えを取捨選擇しながら形成されていた、と考えたほうがよいとする。

コモ氏は、日本佛教研究では親鸞や慈圓に關連して論じられることの多かった「玉女」が、九世紀の日本において佛教とは全く關わりのない、むしろ道教と多くの語彙を共有する方術とともに一般社會にもたらされたことを、出土史料と傳世文獻により指摘した。

劉氏は、明末から清末に至るまでの南陽の武侯祠およ

び醫聖祠において、信仰的には譚處端の法系を繼ぐとされる南無派の道士たちが、官僚や民間の信徒との関係の中で活動するさまを明らかにした。

エスキルセン氏は、明末の有名な内丹道修行者である伍守陽がその門弟と交わした問答の記録の中から、内丹修行者たちが異なるサークルへの關心をもちつつ修行する生々しい現場の状況を分析した。

バートン・ローズ氏は、清朝蘇州の有力氏族である彭氏、とりわけ彭定求とその父彭瓏が、當時天師道道士として朝廷に尊崇される施道淵(二六一七―一六七八)と緊密な結びつきをもっている事實を周到に描きながら、清朝士大夫が單なる好事家の範圍には収まらないほど眞剣に道士と交流する状況を中心に論じた。

最後に、筆者が氣になったことを少し書き記しておきたい。一つは、打ち合わせ段階から指摘されていたことであるが、大陸や香港、臺灣において道教研究が活発になっているなか、日米というくくりで國際會議を開くことにどこまで意味があるのか、という問題である。筆者

は大した答えをもち合わせていないが、日本には日本の、アメリカにはアメリカの道教研究の傳統や評價基準があり、このような會議に参加すると、相手に學ぶべきところが多いことに氣づかされる。また、大規模な國際學會では十分に議論できないことも多いので、やはり日米を定期的につなぐプラットフォームがあつたほうがよいのではないかと思う。

もう一つは、個人的な話になるが、國際會議に参加すると、筆者は「日本人らしい研究をするね」と言われることがあり、自分も日本の研究の傳統に加えてもらえたような氣がしてうれしいのだが、ことさらそう言われるのは、目新しい研究ができていなかったり、海外で話題の新しい資料や方法に十分キャッチアップできていなかったりするからではないか、という後ろめたさも感じる。日本の研究がローカル化しているのだとすれば、それを踏まえたうえで、自分に何ができるのかを改めて考えてみたいと思つた。